



Title	巻頭言：六年は長い？短い？
Author(s)	権藤，恭之
Citation	生老病死の行動科学. 2026, 30, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/103990
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

六年は長い？短い？

How did we live for six years ?

権 藤 恭 之

博士論文・修士論文の公聴会、そして卒業論文の口頭試問がすべて無事に終了した。例年、この時期は一種の安堵感に包まれるが、今年はふと、自分の中にある「六」という数字が静かに熱を帯びて浮かび上がってきた。

修士課程を終えた学生の一人と初めて会ったのは、彼女が新入生だった六年前。当時はコロナ禍の真っ只中で、基礎セミナーの Zoom 画面越しにぎこちなく挨拶を交わしたのを覚えている。もう一人の修士学生との出会いも、二年後の編入時のオンライン面接だった。パンデミックはもはや遠い過去になりつつあるが、彼女たちの成長の軌跡を辿るたび、不意にあの「静止していた時間」へと引き戻される。

今年は、中国から来日した二人の留学生も博士論文を書き上げた。研究生時代を含め、彼女たちともやはり、ほぼ六年という歳月を共有してきた。この「六年」というキーワードは、私の生活のあらゆる場所に根を張っている。調査フィールドの一つである兵庫県朝来市の古民家での2拠点（実際は1.5拠点）生活を始めて、今年で六年目。近隣の方々との交流もまた、六年という月日の中で醸成されてきた。人生を百年に例えるならば、その六パーセントを、私はこれらの人々と共に過ごしたことになる。

その交流の輪のなかに、百五歳の女性もいる。彼女は二〇一二年に始まった「SONIC 調査」の参加者であるが、九十九歳だった彼女に調査会場でお声がけしてからは、LINE でやり取りしている間柄だ。先日、私の教え子が彼女の元を訪ねた。学生の感想を聞き、私は深い感銘を受けた。私が日頃、講義室で説いている「老い」に関する理論が、彼女とのシンプルな会話の中に、これ以上ないほど雄弁に立ち現れていたからだ。

座学から教科書的にそして断片的に理解されていた「SOC 理論（選択的最適化）」や「SST（社会情動的選択性理論）」、そして「一次的・二次的制御」や「老年の超越」。それらが、個人の生の中でダイナミックに融合し、喪失に対する鮮やかな適応の術として機能していたことを感じ取ったに違いない。残りの時間を意識し、日常で生活をコントロールしつつもコントロールを手放し、自立から自律へ、そして依存を受け入れながらも自律を目指す。その複雑な移行プロセスがダイナミックに輻輳する様子を、学生は一人の人間の姿から学んだに違いない。

この六年間、AIの進歩は凄まじく、私たちの情報処理や理解の方法は劇的に変化した。

断片的な知識を学習する機会也大いに増えた。しかし、このエピソードは、対面で語り、体温の伝わる距離で交流することの力は、いささかも衰えていないのではないことを再認識させてくれた。

自らを振り返れば、私はこの六年間、多くの学生たちと人生の六パーセントの時間を共有してきたが、彼女のようになにか力強いメッセージを伝えられたであろうか。学部卒や修士卒だとさらに短い時間しか共有できない。その短い時間で学生たちへなにか貢献できたろうか。ちなみに、本誌に掲載された論文をご一読いただければ、貢献の恩恵に預かっているのは、学生ではなく私であることがわかっていただけたと思う。

六年後に私は退職を迎える。人生における節目やエンドポイントが、ヒトの行動や考え方に影響するという現象は、加齢発達研究が注目してきた中核的要素である。自分自身がそのフェーズに入ったという自覚のもと、このような拙文を書くに至った。六年後にこれまでの六年間を振り返り、「十分に貢献した」と思えるよう、残された六パーセントを歩んでいきたい。

「生老病死の行動科学」第30巻を含めて、大阪大学の機関リポジトリである大阪大学学術情報庫 OUKA (<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>) で本紀要を公開していますので、ご覧いただければ幸いです。